

書 評

掛谷 誠・伊谷樹一編、『アフリカ地域
研究と農村開発』京都大学学術出版会、
2011 年、420 p.

重富真一*

本書は、研究者がアフリカの農村に入ってその社会を調査研究するだけでなく、地域開発にまで参加し、その経験からアフリカ社会をさらに深く理解しようとした、その成果である。ここでの開発実践は、1999 年から 5 年間、JICA がタンザニア、ソコイネ農業大学の協力の下におこなった地域開発プロジェクトで、それに関わった筆者等が 2004 年から科学研究費補助金を得ておこなった研究成果が本書にまとめられた。地域研究の延長に開発実践をおこなった、という点が本書の新味であり、そこに本論評の焦点も当てられる。

本書には節ごとに数えると 17 本の独立論文が所収されており、ここでそれらひとつひとつを紹介する余裕はない。また評者はアフリカ研究を専門とする者ではないので、詳細に現地事情を紹介した個々の論文について検討する任には適さない。そこで、本全体のメッセージを紹介し、それに対する評者のコメントを記す中で、必要に応じて個別の事例研究にも言及していきたい。

さて、評者が理解するところ、本書のおおまかな主張は以下のようなものである。

(1) アフリカの地域社会を理解するには、

アフリカ社会の特色を踏まえた調査研究が重要である。

- (2) 開発実践をおこなううえではさらに個別対象地域の特性（焦点特性）を捉える必要がある。
- (3) 地域社会にはそれぞれ独自の潜在力（在来性のポテンシャル）があり、それを引き出す開発実践が必要である。焦点特性はそうした潜在力が何かを典型的に示す。
- (4) しかし実践では何が起きるかわからないし、むしろ意図とは別のことが起きることこそアフリカ的である。そうした予想に反した出来事を無視せず、その後の開発実践に役立てねばならない。
- (5) そのために重要なのは研究と開発実践の間をつなぐ試行（試験的実施）過程である。
- (6) 以上のような実践をおこなえば、発展メカニズムが内在化し、地域の持続的な発展につながる。

上記の番号に沿って、著者等の主張を個別に検討しよう。

(1) アフリカ社会の理解については、序章でそのための概念が示されている。たとえば、最小生計努力、平準化機構、エクステンシブな生活様式、内的フロンティア世界、情の経済、モラルエコノミーなど。これらの中で、後の事例研究でもしばしば登場し、また重要と思われるのは、「平準化機構」である。平準化とはより多くもつ者がもたざる者に食料を分け与えるべきという規範のことで、この概念を使って新しい技術や作物の普及のあ

* アジア経済研究所地域研究センター

り方も説明される。つまりイノベーションが広まるのは、皆が分かち合うからだ、という。

しかし平準化機構は現金についても働くのだろうか。本書を読む限りアフリカ社会でも現金経済の浸透は相当に進んでいる。金は食料と違っていくらあっても困らない。そういう社会になっているにも拘らず、平準化機構が農村住民の経済にどの程度意味をもつのだろうか。また仮に新たな作物・技術が村の皆に普及したとしても、それが即、人々の経済を平準化する訳ではない。経営規模、技術、コネなど個別農家の違いが成果にはっきりと現れる作物・技術が広まれば、むしろ格差は拡大する。しかし本書ではそうした批判的検討はなされていない。

(2) 焦点特性とは本書のキー概念である。開発対象地域の焦点となる特性のことであり、それを見出すことで対象地域の在来の能力を引き出すことにもなる、という。本書では2つの調査地域それぞれに、焦点特性が説明される。マテンゴ高地の場合は、ンタンボという川の支流などで区切られた山腹をなす地形単位で、ひとつの親族集団が占有し、生産・生活の単位となっているものがそれである。もうひとつはウソチェ村の焦点特性で、「疎林・ウシ・水田稲作の複合」と「民族の共生」がそれにあたる。疎林・ウシ・水田稲作は循環系をなしており、そのバランスを維持することが重要で、そのためには異なった民族が平和に共存する必要がある。

しかしここで示された2つの焦点特性は、まったく違うカテゴリーに属する概念である(一方は地域単位、他方は生産部門間の生態

的關係と民族間関係)。どうやら調査地ごとにどういう概念を当てはめるかは、研究者の思いつきに任せられているようだ。だから焦点特性は、ひとつの地域社会を長く深く調査しなければ見つからないし、地域社会ごとにまったく異なる。言い換えれば、この手の調査研究手法は汎用性に難がある。

それぞれの焦点特性についても疑問に思う点がある。ンタンボを焦点特性としながら、実際の開発実践では行政村を単位に実践をし(ハイδροミル設置)、しかも成功している。それならば焦点特性とは何だったのか。ウソチェ村についていえば、牛車が焦点特性の象徴だというのが、10回の牛車利用のうち、生態系に関係がありそうな牛糞運搬は1回のみであり、ほとんどは煉瓦の運搬であった。

(3) 「在来性のポテンシャルに根ざした開発」という主張は、「内発的發展」や「地域に根ざした發展」と同じであり、それ自体はすでに言い古された言説である。大切なのは、地域社会にある諸条件の中から開発のポテンシャルとなる条件を見つけ出すことであろう。それを見つける方法が、焦点特性なのだと言者は理解したのだが、焦点特性には前項で述べたような問題点がある。

(4) 意図とは別の結果が生まれることを、筆者等は「創発性」と名付け、アフリカの内発的發展を支える特性だという。あるいは偶然に起きたことを開発に役立てる、という意味で「偶然の必然化」ともいう。

しかし、ものごとはなかなか意図どおりに進まないものである。それがなぜ「アフリカ的」なのだろうか。また仮に意図どおりの

結果が出た場合、筆者等はそれをどう評価するのか。創発的、偶発的であるか否かと、起きた現象が開発にとって肯定的か否かということは、別のことである。

(5) さてそのような意図と異なる現象が起きたとき、それを計画にフィードバックする過程が必要である。一般に物事を実施するときには、Plan（計画）—Do（実施）—See（評価）のサイクルを繰り返して進んでいく。本書の特色は、そのサイクルを調査研究段階、試行段階、実践段階に分けたところにある。そして段階ごとに計画、実施、評価の過程を置き、それらを線でつないで、その線の形から NOW 型モデルと名付けて提唱している。このうち O の部分が試行段階であり、このモデルの眼目である。なぜ O かといえば、評価から計画へのフィードバック線があるため、線が輪を描くからである。

ここで不思議なのは、調査研究段階と実践段階にこのフィードバック線がないことである。まさかフィードバックが不要というわけではないだろうから、形を NOW とするために省略されたのであろう。もしその線を描けばモデルは OIOVO 型になってしまい、たしかにカッコがよくない。しかしモデルを美しくするためにフィードバック線を消し去るのは本末転倒である。フィードバックは「偶然の必然化」のために不可欠の行為のほゞである。

そもそも「開発実践をする場合に、試行段階が重要」という主張は、目新しいものであろうか。むしろ、開発事業に限らず大規模な実践をする前には、何らかのモデル事業、パ

イロット事業をおこなうのが普通であろう。

(6) 開発の動因を内在化ということは、開発援助の重要な課題である。さもなければ開発はプロジェクトの実施期間中にしか起きず、被援助者の依存症を招くだけだからである。この問題を強く意識して、本書では開発の進行過程を追いかけ、それが立ち上がり—昂揚—沈静という段階を踏んでいるとした。何事も、新しいことを始めると、それが軌道に乗れば昂揚感が出て、そのうちそれは静まって行くであろう。だからそれ自体は何ら新しいことではない。むしろ本書の特色は、この沈静化段階を「開発の内在化」と捉えたところにある。

しかし沈静化するかわち内在化であろうか。事例研究のひとつは、農民グループの活動に一種の「飽き」がみられるとし、これを「沈滞」ではなく「日常化」（内在化）だというのが、根拠はどこにも示されていない。本プロジェクトの実施過程をみると、事業成功に不可欠な資源や助言を支援者がしばしば住民に与えている。ハイドロミル事業の資金やそれが内部対立を引き起こしたときの助言は外部者によるものである。養魚事業を始めたと思った住民は、自分たちで資源を調達するのではなく外部者に頼ってきた。牛車も援助者が与えた。その利用管理について住民の対立があると、やはり援助者が助言をしている。こうした援助が悪いというのではない。援助の結果が、内在化したか、それとも依存症を作ったかを、いかなる根拠や指標で判断するかを筆者等に問いたいのである。

農村開発は地域住民が開発の主体となるこ

とで初めて持続的・自立的となる。そこにつながる開発援助のためには、対象地域住民の行動を律する仕組みについて深い理解が必要である。この論理に立って、研究者自らが研究と開発実践をつなごうとした本書の試みは高く評価できる。

しかし本書はそうした仕組みの解明にどこまで成功したのだろうか。持続的開発の実現、すなわち筆者等のいう「内在化」が本当にできたのか、あるいはどうすればできるのかは示されていない。地域社会の仕組みは「焦点特性」を通して把握されるようだが、本書で示された2つの焦点特性は、概念のカテゴリーがそれぞれ違っていて、なぜそうした焦点特性が導き出されるのか、調査をおこなった当事者以外にはわからない。焦点特性は、筆者等のように対象地域を徹底的に調べた人にしかみえてこないのであろう。

こういう焦点特性の把握方法に依拠した開発援助は、面的な広がりをもち得ない。NGOが途上国のいろいろな村ですばらしい実践をしているけれども、いつまで経ってもそれらが「成功事例」に留まるのと同じである。研究者が実践に関わるなどという方法も、めったにできることではない。

いま研究者に求められているのは、地域社会の仕組みをどう把握するのか、開発実践に携わろうとする人なら誰にでもわかる仕方で示すことである。ごく普通の地方行政官、地域リーダー、フィールドワーカーが、自分の担当する地域の「焦点特性」をつかむ方法を示すことである。

佐川 徹.『暴力と歓待の民族誌—東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』昭和堂, 2011年, 437 p.

曾我 亨*

待望の書物が刊行された。佐川による『暴力と歓待の民族誌』である。佐川のすばらしい学会発表を聞いた者は、誰もがその全貌をまとまった形で読みたいと待ち望んでいたに違いない。本書は2009年に京都大学に提出された博士論文をもとに書かれている。この鮮烈な書物を、世界中の学者に先駆けて日本語で読めるとは、なんと幸運なことだろう。

以下、本書の内容を示し、論評していこう。本書はエチオピアの深南西部にくらす牧畜民ダサネッチを対象としている。好戦的とされる牧畜社会の戦争と平和を真正面から取り上げている。本書の構成は次のとおりである。

第1章 序論

第2章 ダサネッチの概要

第3章 国家と集団間関係

第4章 戦争経験と自己決定

第5章 横断的紐帯と境界

第6章 外部介入と平和維持

第7章 結論

第1章においては、戦争と平和をめぐる本書の立ち位置について説明されている。まず、戦争と平和に関する従来の人類学的研究の多くが、人間の本性を好戦性にもとめるホップズ的人間観と、平和性にもとめるル

* 弘前大学人文学部